ーアダルト小説ー

バー・アンバー（5）

多谷 昇太

そのミキが俺のわきをスルリと抜けてサムターンを廻しドアを内側へと開ける。そこにはふくれっ面をしたママが仁王立ちしていて「こら、ミキ。合鍵で踏み込んでもよかったんだよ」とミキにもの申した。ダッフルコートはいつの間にか脱いでいたがその分スカートの下にスラックスパンツというダサさが目立つママ。背後の俺を忌々し気に睨むと「お客さん、ミキはこれから特別なお客さんのところに専用ホステスとして行くんですよ。このお店だってこの時間帯は普通は閉まってて、余程の客でない限り貸し切りで使わすことはないの。まったく…このミキは上玉、特別なんですよ。あんたがどんな人だか、私はまだ知らないんでね…」とあてつけがましくのたまわった。俺は『ほ、ほう…』とばかりママの言葉を頭の中にメモをする。苛立ちさ加減と云いこれは本音であり、たぶん真実だろう。今後への重要な手がかりになる。「ああ、わかった。ママさん、すまない。時間を取らせて。じゃ、とにかく会計をしてくれ。ミキがいなくなるんだったら俺もこれ以上ここにいる気はないんだ」と云うのにママではなくミキが「聞いたでしょ、ママ。田村さんも…あ、いや、お客さんもお帰りになるって。わたし最後にお会計を清算して行くわ」と口をはさむ。しかしママはふくれっ面をなおふくらませて「なーに云ってるの！もうこれ以上一秒でもパパを待たせられないわよ！おいで、ミキ」と云いざまミキの手首を引っつかんで引っ立てようとする。だがミキは腰を引いて抗いながら「イ、イヤダ。チョッ、チョットマテヨ！ワタシ、タムラサンノカイケイ、ドーシテモスマセテイクヨ！ジャナカタラ、ワタシ…ワタシ、イカナイヨ！」と抗弁して聞かない。さすがに見ていられない俺がミキの手を掴むそのママの手を鷲づかみにする。「おい、よせよ、ママさん、乱暴は。ミキにだろうとあんただろうと今すぐ勘定するからさ。引っ立てなどするな」「なんだってえ～」ママの額に青筋が浮かぶ。俺の顔を引っ掻きでもするかと危惧した刹那表のドアが開いて黒メガネをかけた一人の屈強な若い男が入って来た。ツ、ツ、ツとばかり立てた人差し指を顔の前でふってみせる。

【強引に連行され行くミキのイメージ。何も自由にならない！絵・by Angela Lazeta (from pixabay)】

「ママさん、乱暴はなしだ。ここを暴力バーとお客さんに思われたらどうする？ふふふ。いいからミキさんに会計させろよ。これは先生の云いつけだ」それを聞いたママの態度が豹変する。「あ、ああ、そうかい。わかったよ。お、お客さん、手を放してくださいよ。そんな怖い顔をして（よく云うよ！）。じゃミキちゃん、お会計お願いするわ」と云ってからドア近くにいる若い男のもとへ行き小声で何事か訊いた。それに「…いいから。それに貸し切りとか余計なことを云うな」とこちらも小声で返したようだ。面目を保てたせいかそれとも俺がぼったくり料金を取られないで済んだせいだろうか安堵の表情を浮かべながらミキが俺を会計へと誘う。俺をカウンター前に立たせたあとで自らがカウンターの中に入りさきほどの手提げ金庫を取り出した。手書きの領収書を出してそこに金額を書き込んでから「ジャ、タムラサン、カク二杯デ、四千円イタダキマス」。言葉のイントネーションはママの乱暴を受けて来のままだ。その理由は俺にはもう容易に察しがついていたが。しかしそれにしてもたったの四千円とは暴利、い、いや暴安だ。ミキへの驕りの分も含めて少なくとも八千円にはなるはず。俺はミキに〝抗議〟した。「おい、おい、ミキ。そりゃ計算違いだ。ダブル四杯で八千円だろうし、それに君のサービスも考えれば額が一桁違うでしょ。うーん…四万円払うよ」そう云って財布を出すのにミキは「イイエ、二杯ハオミセノオゴリヨ。マタキテホシカラネ、四千円デイイヨ」と答えつつドア近くにいる二人に気づかれないように領収書の裏面に何事かを書き込んだようだ。そこ

へママからの信じられない言葉が掛かった。「そうですよ、お客さん。四千円だけで結構なんですよ。あとの二杯分は私が泣きます。ほほほ。うちは庶民的な大衆バーですからね。どうぞまた来てください。ただ…開店は五時ですからね」とのたまわる。今さっきの「ざっと３０万円いただく」はどうした？一転して人のよさげなママに豹変した分けを考えながらも俺はとにかくこれ見よがしに一万円札を一枚ミキの手に握らせた。小声で「ミキ、いいからそれを受け取って」とささやいたあとで今度は聞こえよがしに「ああ、必ずまた来るよ。こんないいお店、一見ですます分けないさ。ママさん、一万円払う。釣りはいいからね」と見栄を切った。内実は人一倍損を毛嫌いするだろうママの性分と、そう見切ってのことだ。実際のところ後日再訪を期していたのでこれは必要なことだった。「アリガトゴザイマス」素直に一万円を受け取ってそれを金庫に仕舞い領収証を俺に手渡すとミキはカウンターから出て来て二人に背を向けて俺の前に立った。「ジャ、タムラサン、オワカレノアクシュ」と云って俺に手を伸べる。握り返そうとする俺の手首をつかんで自分の焦げ茶色のブラウス越しに胸に当てさせ乳房を揉ませるのだった。そして「ジャ、タムラサン、キットネ」と言い残しそのまま男とママの間をすり抜けて表へと出て行った。あとを追って俺も出ようとすると若いもんが立ちはだかった。眉根を寄せて険呑な表情を浮かべるとその場で空手の猫足立ちの構えをし、ひとふりふたふり空の突きと蹴りを入れてみせ、さあ掛かって来いよとばかり右の手で俺に来い来いをする。その型は堂に行っていて、そのバネのありそうで屈強そうながたいと云い、まずこの若いもんが相当に危険な存在と知れる。少なからず萎縮する俺の様子を見てとると

【入って来た若いもんのイメージ。絵・gnanasathees suntharam(from pixabay)】

今度はわざとらしく両の手を合わせて俺に合掌して見せ「このまま少々お待ちを」と云い残し、ママに目配せをしたあと素早く身をひるがえして表へと、ドアを叩きつけるように閉めて出て行った。一瞬二瞬躊躇したがミキを思えば居たたまれず、またアイツを、先生とやらを、さらには車のナンバーをも確認しようとして俺も外に出ようとする。しかしママが素早く立ち塞がってガチャリとばかりドアのサムターンをまわしてしまう。「ねえ、あんた。止した方がいいよ。悪いことは云わないからさ。あの若いもんはコレだからね」と云って人差し指で自分の頬をなぞって見せる。やかましい、このオバンと云ってママを除けようとも思うが後の再訪を思えばそれも差し控えられる。どうしようかと必死に対応を考えるうちに足元に格好の珍客を発見した。ゴキブリだ。俺はニヤリとして「ああ、そうかい。そりゃ確かに考えもんだな。だがな、ママさん、あんたの足元にいるやつも俺は相当にこわいんでね」と珍客を指し示してやった。「ひっ」とばかり怯むママさんをていよく脇に押しやると俺はサムターンをまわして脱兎のごとくに表に飛び出した。路地の左右を素早く見まわすと右側の、渋谷センター街から文化村大通りに抜ける一通に止めてあった車が今しも発車したところだった。それを追って駆け出すが車は文化村大通りをもう左折しようとしている。車が斜めでナンバーが読めない。俺は年甲斐もなく猛ダッシュして文化村通りに出、その歩道を道元坂下信号に向かう車を追って駆けて行く。如何せんその道元坂下の信号は車に青だ。歩行者たちを懸命にかわしながら追いすがり遠退く車のナンバーを必死に読む。練馬ナンバー××××、そして後部シートに座る二人を見る。右側にいるミキに何事かを語りかけている男の横顔は…アイツだ。釣銭を持って入って来た紛うことなきあの黒メガネをかけた初老の男。かろうじてそれを確認したところで俺は通行人に突き飛ばされ歩道に転がった。アベックの男から「てめえ、こんなところを走るんじゃねえよ！」女から「キャっ、かわいそ」とか其々怒鳴られおちょくられた俺はしかし「す、すいません。ごめんなさい」とただ平謝りする。アベックにぶつかりそうになったので俺は直前にかわしたのだがそれなのに男があえて突き飛ばしたのだった。しかしミキとの奇跡の邂逅をし、その後のスリリングでサスペンスな展開を思えばこんな粋がったアベックに構うつもりなどなかった。俺は立ち上がってなおも眼づけする男に何度も謝ったあと道玄坂下信号をめざして歩いて行

った…。
（※お断わり：ごめんなさい。筆者のうっかりミスで実は次章の（五）桃畑の前に入れるべき（四）田村ＶＳマッドサイエンティストを挿入し忘れていたのです。その章の範囲は「バー・アンバー（４）」冒頭の４０ページから当「バー・アンバー（５）」の現ページにあたるところとなります。たいへんもうしわけありませんが、それを踏まえて次章にお進み願います）

（五）桃畑

（※この第五章タイトル・桃畑の所以はわたしが中国小説家の廢名（本名・馮文炳１９０１～１９６７）による小説「桃畑」に痛く入れ込んでいるがゆえです。同小説は「小説詩」とも命名すべき、あえて云えば小説にあるべきＴＰＯをすべて無視したような、なんとも幽玄さと感傷に充ちた、全編これ詩のような作風を持つ珠玉の作品であるからです。これを読めば主人公の少女の何とも痛ましい、それでいながら桃に託した愛すべき感性がびんびんと伝わってまいります。現実は少女の父が収穫した桃の実をすべて酒代に変えてしまうような超貧しく、悲惨なものなのですが、しかしそれゆえにこそ少女の幼気な純粋さが読者にストレートに伝わって来るのです。ぜひ一読をお勧めする次第ですが、その名作には及ぶべくもない当拙小説「バー・アンバー」にもその〝小説詩〟の手法を取り入れたく、これよりの第五章を書き進めていく所存です。夢か現か、田村淳二が桃畑の世界におりてまいります…）

【廢名の小説「桃畑」をイメージした左の写真２点です。主人公の可憐で純粋な少女の魂と峻厳な現実との相克…ですかね】

道元坂下の信号を渡る内に生理的な欲求を無性にもよおし渋谷駅ではなく１０９へと足を運ぶ。１０９正面入り口横にある階段を上ると２Ｆ外のテラスに喫煙所があるのだ。１０人ほどいる喫煙中の連中から出来るだけ離れたところでわかばを取り出し火を点ける。生理的な欲求を充たしながらバー・アンバーでの出来事に思いをめぐらす。「タムラサン、キットネ」ミキの最後の言葉と、あてがった胸の感触が心を揺すった。まったく平々凡々な人生でその一生分を越えるような思いをさせてもらったぜ…などと心中で独白する。さてこれ以降どうしてミキとの約束を果たしていこうかなどと思いをめぐらすうちに内ポケットのスマホが振動した。あ、いけねとばかり電話口に出る。「もしもし」「田（デン）さん、どうしたい、いつまでも電話くれないでさ。インタビュー終わったんだろ？」「ごめん、ごめん。ちょっと野暮用が出来てさ、連絡遅れちゃった。ああ、終わったよ。ハコ用の写真もバッチリ撮ってある。これから家に帰って明日中に記事を送るよ」「オーケー、次週号の一面トップだからね。頼んだよ」「ああ」電話口の相手は俺がライターをやらせてもらっている介護系新聞社のデスクだ。山口という名の俺より３つ年下の男で俺とは気の置けない仲だった。「連絡遅れるなんて田さんにしちゃあ珍しいからさ、俺はまたヤー公にやられたのかと心配しちゃったよ」などと物騒なことを云ってくる。「おいおい、俺を殺すなよ。まだこうしてちゃんと生きてるよ。遅れたのはさ山ちゃん、ナニのせいだ」「何？ナニ…？ナニって何よ。その年で女買いに行ったの？真っ昼間から？」「よせよ、行く分けないだろ。そっちの方はもう久しくご無沙汰だ。そんなんじゃなくてさ、ちょっと電話じゃ云えないような珍しい女だ。今度聞かせてやるよ。それよりもう5時だ。閉め忙しいんだろ？切るぜ」「おお、わかった。しかしその思わせぶりな形容がなんとも気になるな。近いうちにぜひ聞かせてや」「ああ、じゃあな」「おう」で電話を切った。山口が云ったヤー公というのは俺がミキに口走ってしまったことで、俺がブログで、あるいはユー・チューバーとして主張、特集した内容に、暴ヤクザ組織が因縁をつけてきているのだ。その経緯はいづれ後述しよう。いや、待てよ、相手はいくらでも相談に乗ると云ってくれたミキの方がいいかな？ま、それは冗談だが…。さてとハチ公広場の人だかりを抜けて駅に向かおうとしたところで肝心要なことを思い出した。やおら内ポケットから手帳を取り出すと練馬ナンバー××××と

書き込みそれ仕舞って今度は右側のポケットからミキからもらった領収証を引っ張り出す。その裏面を見ると果してそこには〝サマンサ・クリニック〟〝巣鴨やくざ××組〟と走り書きで記されている。「ほ、ほう」とばかり俺は心中で唸った。ミキの機転のよさと、その執念の業に感心したのだ。これは調査する上でとんでもない手がかりとなる。車のナンバーから住所を割り出すのはきついなと危惧していたのでもしかしたらそれが省けるかも知れない。「サンキュー、ミキ。待ってろよ。この世で君のために動けるのは俺だけだ。次に会うまでには必ず調べ上げてやるぜ」と意気込んだが、しかし同時に調査すればするほどヤクザの締め付けはきつくなるだろうなと危惧されもする。ただでさえいま俺にカマシをかけているヤクザだけでもうざったいのにその上…ということだが、かまうものか乗りかけた船だとばかり褌を締めなおす俺だった。さても此処の喫煙所に来てからいったい何本目のタバコに

【駅に街角にたたずむ霊たちのイメージ。pixabay からAnja-#pray for ukraine# #helping hands# stop the war による作品】

なるのかフィルター近くまで短くなった煙草を携帯灰皿に消すと、その縁まであふれた吸い殻の山をスタンド灰皿に捨てて、俺はやおら１０９の階段を降りて行った。マスクを掛け直した顔に何やら黴臭いひんやりとした風が吹いてくる。何か重たい風だなと思った刹

那降りて行く階段のわきにたたずむ一人の女の姿を俺は確認した。ん？と違和感を覚える。階段にピタリと身を寄せてうつむいて立っている女の姿がどこか周囲と隔絶しているように、浮き上がっているように見えるのだ。女の前を行き来する通行人たちは誰一人その存在に気づいていない様子。白のブラウスにフレアスカートをだらしなく着込んでいてブラウスの裾は二カ所ほどスカートの上に出てしまっている。階段を降り切った俺は後ろ目でその横顔を確認して愕然とした。これは…生きている人間の顔ではない！灰色に皮膚が縮んだ死相と云うよりは文字通り死人そのものだ。死人が街角に立っているのである。誰一人自分の存在に気づいてくれない（俺を除いて）ことに絶望して究極の悲哀のうちに沈んでいるように見える。地縛霊…だろうか。なんともやるせない気持ちになったが俺は首を一振りしてそのまま駅へと向かって行った。いくら俺に霊感があると云ってもこんなことはまったく始めての経験である。全体ミキとの邂逅が影響しているのだろうか、まったくわからない。痛く戦慄を覚えたが、だがしかしこれはほんのとっかかりに過ぎなかったのだ。このあと駅ビルに入るまで（いや入ってからも）ハチ公前の広場の其処彼処に、あるいは車道の道路際にも、たとえば首の折れた若者が座り込んでいたり（交通事故死したライダーだろうか？）路上生活者と思しきしかし死相を浮かべた男が横たわっていたりしていたのである。彼らの存在には誰一人気づかずにそれどころか彼らの身体をそのまま突き抜けて行く始末。広場の人々をうらやましげに見ている若い男女の霊たちは生前はおそらく此処で人々と同じように人生を、青春を楽しんでいたのだろう。思い入れのあまり死後も地縛霊となって此処に佇んでいるのだ。そしてこのあとも、駅ビル内の通路を行くうちに顔中を血だらけにした男がいきなり出現したり、真っ青で気味の悪い笑い顔を浮かべた女が、両手の爪をかざして行き来する人々に襲いかかろうとする姿を目撃したりもしたのだ。駅のホームに上がったら上がったで今度は目の前の線路に轢死体を見る始末。もうもうたまらない気持ちになった俺は進入して来た東横線の急行電車に乗るや否やいち早く座席を確保してそのまま俯いて固く目を閉じた。もう何も見たくなかった。無理矢理にでも自分を睡眠に誘いそのまま自分の住まいのある横浜まで電車に身を任せたのだった…。

俺の住む横浜市営団地は横浜駅で相鉄いずみ野線に乗り換え快速線で九つ目のいずみ中央駅で降りたとこ

ろにある。と云ってもそのいずみ中央駅に止めた駅前駐輪場から自転車でさらに１５分ほど走らねばならなかった。駅を背にして北西の方角に走るので最初は気づかなかったがバス通りを左折して団地に至る小道に入った時に始めて南東の夜空に凛と輝くハンターズムーンを確認した。ハンターズムーンとはアメリカの先住民によって名付けられた名前で狩猟に最適な月ということらしい。今夜はその名が特に云い当て妙という塩梅で、渋谷駅来急に開けた霊眼（なのか？）のせいでさんざん恐ろしい目に会って来たせいか、自分が何者かに狩られているような、いや追われているような、いやいや憑かれているような気がしてならないのである。日本語で表現すれば逢魔が時と云うにピッタリな夜。その証拠にほらこん畜生（と云ったら仏様に失礼だが）、団地に至る直前の、急な下り坂の先にある信号付き十字路にまた男性の幽霊が現れた。この間そこで車同士の衝突による死傷事故があったのだ。おっかないやら、ビックリやらの連続で些か馴れっ子になった気もするが、しかし未だとても直視する気になれない。重い足を無理に上げながら団地の階段を上っていく。団地にエレベーターなどないのだ。俺の部屋は五階建て団地の４階でちなみに４０４号室であり棟番号

【ハンターズムーン】

は４０棟だった。四四尽くしだ。さても部屋に着いた。台所の椅子に腰掛けてとにもかくにもサントリーの角を持ち出す。冷蔵庫の氷をグラスに入れオンザロックだ。ミキ（の胸を？）を思い浮かべながら何杯か空けた。今晩これからパソコンに向かい記事を書き上げる気がしない。ほろ酔いになったせいもあるが背広とネクタイをハンガーラックに引っ掛けると俺はソファアベッドの上に身を投げた。渋谷駅来何か、どこか、身体の感覚が変なのだ。いま此処にいながら同時にどこか別の場所にいるような、とても不思議な感覚がする。大昔、若い頃に中東のアフガニスタンでハシシをやったことがある。始めてだったのでトリップしてしまい感性が次元の壁を越えて行くような、一種天国にいるような感覚がしたものである。それに近いだろうか？ハシシ、麻薬…ん？待てよ。あの時ミキの手が俺の髪をまさぐって…そしてチクリと。「ああ、そうか」と合点したところで俺の意識は失せた。　（続く）

【ハンターズムーンに紛うミキの胸…のイメージ】